

.....IV334	仲津 藤十	III501	駒井 付之助	IV420
.....IV337	神津 頼祐	IV138	駒井 啓	IV668, V541
.....IV345	神津 猛	IV269, V467	駒木 秀太郎	IV274
.....IV438, V500	神津 包輔	IV280	駒野 義夫	IV004
.....IV507	神津 重太郎	IV322	駒峰 忠郎	II461, V563
.....IV568	神津 仁重郎	IV518	籠手田 竜	IV187, V456
.....IV592, V532	神津 喜重郎	IV649	是石 辰次郎	I713
.....IV626	神戸 弥作	IV123, V312	是枝 兎一	II464, V356
.....IV649	紅田 市造	III082	今野 幸平	V112
.....V005	紅田 力造	IV115	近 権内	IV736
.....V066	香坂 太郎	IV246	近藤 徳太郎	I103, I190
.....I718, V225	香坂 六郎	IV276	近藤 浩平	I220
.....IV537	香坂 一郎	IV753	近藤 良薫	I226, I760
.....IV662	高 辰	I635	近藤 鉄吉	I316
.....III143	高鹿 正亮	III433, V432	近藤 孝行	I416, V152
.....III385, V414	高坂 久太郎	II227	近藤 衛	I642
.....V411	高祖 定吉	IV197	近藤 勝敏	I736
.....II542	高羅 殿満	IV284	近藤 英作	II057

本人姓名 入田清三郎

本籍身分 淺草區新吉原揚屋所主番地平民芳太郎長男

明治九年七月生 明治廿五年五月入社

淺草區新吉原揚屋所主番地 入田芳太郎

本人姓名 佐野朝次郎

本籍身分 茨城縣信太郡江戶崎所百廿三番地文助次男

明治十二年一月生 明治廿五年五月入社

本所區松井所二目廿四番地 齊藤藤ノノ

同上

本人姓名 柴藤儀吉

本籍身分 福岡縣那珂郡千代村千百廿番地平民仁三郎長男

明治八年十月生 明治廿五年五月入社

神戶區神田南町町事番地 林天順

同 上 本郷区湯島天神町壹丁目字八郎地

本人姓名 香坂六郎

本籍身分 長野縣上伊那郡南村八番地平民重次郎弟

明治八年七月生 明治廿五年五月入社

証人姓名 芝區重所五番地 阪井品治

同上

八八

本人姓名 伊佐早賢逸

本籍身分 新潟縣南魚沼郡富實村大字大野沢番地平民彰子

明治六年七月生 明治廿五年五月入社

下谷區下谷所二目六番地 監入鉦太郎

かノ部

入会年月

香川	出	府下下湊谷四七八字野	山口	十三、	鹿
香川	力夫	東京市役所吏員	府下大崎町桐ヶ谷六六	宮城	十五、
香坂	六郎	八野縣上伊那郡南向村	長野	三十、	鹿
香椎	巖	長野	四十、	賈	
春日	勝太郎	長野縣上高井郡穗波村	長野	三十、	嘉
春日	示	三井物産株式會社員	府下蒲田町女塚一三五	長野	十三、
春日	文雄	東京農物商報社員	淺草區諏訪町二九東京	長野	十五、
春日井	史郎	八千代生命保險株式會社橫濱支店長	橫濱市尾上町四ノ六五	愛知	十一、
春日屋	關男			愛知	四三、
夏	循			支那	卅七、
夏	國瑞			支那	七五、
鹿野	彌四郎			宮城	廿九、
鹿野	瀧吉	北海道總土木部道路課員	北海道札幌市南十二條	北海	七六、
鹿又	武三郎	仙臺市長	仙臺市	宮城	廿八、
鹿毛	久藏		市外青山原宿青山一ノ五號館六六號	福岡	十三、

海保	知嘉	千葉	十四、	門井		
海沼	勝藏	下谷區根岸町四〇青島	新潟	十三、	門井	
海田	英二	赤坂區青山南町六ノ一	茨城	十一、	門脇	
海妻	義方	福岡	四三、	門田		
開發	松三郎	今治區裁判所檢事	愛媛縣越智郡日吉村藏敷	石川	四三、	門田
戒田	集	會計検査院書記	府下戸塚町下戸塚四三	愛媛	十五、	門田
蒲田	新太郎	文部屬	府下品川町南品川第一	京都	九、	門田
蒲田	實			京都	十二、	門倉
蒲田	安五郎	東京電氣株式會社員	川崎市南河原六七二	神奈	十四、	門屋
蒲生	武司			福島	三十、	梶原

兄
六
輩
行
欣
何碌々妄伍凡庸、無為而可終乎、又必勿學為其器却自損之身
之愚、予輩為邦家偏祈諸君之健康刮目以見諸君之举措、敢一
言代祝詞。

川島龜夫

答辭

明治丁酉七月十五日東京法学院卒業証書授与式ノ典ヲ挙ケラ
ル不肖幸ニ其席ニ列シ院長閣下ノ懇篤ナル訓諭ヲ拝受ス光榮
何ニ似ン是レ上ハ 叡慮ヲ學ニ注カセラレ下ハ本院講師諸賢

87 東京法学院第十二回卒業生

〔『法学新報』第七六号 明治三十年七月二十日〕

○本年の卒業生

法学院第十二回の卒業生及優等生の氏名左の如し

○卒業生姓名

邦語法学科

和歌山県士族 森 榮	山口県平民 和田四郎
千葉県平民 加瀬禧逸	東京府士族 根本仙三郎
新潟県士族 永井金次郎	愛媛県平民 池原鹿之助
高知県平民 松本正寛	栃木県平民 鯉沼平四郎
千葉県平民 秋山甫一郎	千葉県平民 椎名榮藏
和歌山県士族 飯田健次郎	福島県士族 大橋三郎
岡山県平民 新免峯太郎	島根県平民 徳田直吉
兵庫県平民 小野木安太郎	宮城県平民 堀口彌助
東京府士族 岡部重一郎	栃木県平民 中山 奎
青森県士族 蝦名熊三	和歌山県平民 吉村幹三郎
新潟県平民 寺澤健吉	大分県平民 岡本重市
神奈川県士族 梅田久行	山形県平民 壺 國 吉
愛知県平民 加藤新次郎	東京府士族 山中榮吉
山口県平民 守川元介	山形県士族 吉田佐太郎
奈良県平民 中尾織太郎	高知県士族 吉本彦次

全太	岐阜県平民	日高志一	岡山県平民	池上文太郎
新吉	長野県平民	野澤政平	福岡県平民	倉員健介
庄吉	愛知県平民	矢田由次郎	静岡県平民	大塚表一
武俊	長野県平民	竹内卷太郎	山梨県平民	中田富則
定吉	岐阜県平民	田代幾次郎	岩手県平民	高松源治郎
吉太郎	兵庫県平民	中村誠之	岩手県平民	大曲常藏
猪熊	長野県平民	赤羽一	千葉県平民	岩瀬恭藏
明治	福岡県平民	高橋元次	熊本県士族	緒方重雄
根之助	茨城県平民	土屋理喜治	岐阜県平民	小川亮二
五郎	千葉県平民	進藤守江	岡山県平民	朝原熊太郎
庄三郎	高知県士族	阪本重英	岡山県平民	常光金次郎
三郎	茨城県士族	福岡榮壽	岡山県士族	村田太郎
要次郎	青森県平民	上野恵宇内	香川県平民	富家虎吉
治三郎	滋賀県平民	竹村新平	福岡県士族	佐藤美雄
勝次郎	埼玉県平民	早野善太郎	青森県平民	中村多三郎
安記	広島県平民	橘 績	埼玉県平民	内田牧之助
喜太郎	高知県平民	吉村友次郎	長野県平民	田口碩次郎
田 敏	千葉県平民	關 讓	埼玉県平民	田口菊太郎
俊龍	長野県平民	香阪六郎	兵庫県士族	村山一平
木 貞	東京府平民	小菅寅吉	長野県平民	矢澤榮三
津庶	東京府平民	脇屋義矩	山形県平民	奥山直治
喜久治	秋田県平民	北島直之助	山形県平民	金子鶴一
政太郎	京都府士族	吉岡辰藏	山口県平民	河内定輔
鎌吉	埼玉県平民	中村太忠治	岡山県平民	博見敏雄

悠三郎	兵庫県士族	星合元吉	秋田県平民	富樫庄之助
綱三郎	大阪府平民	石橋孫一	神奈川県平民	伊藤卓爾
順作	茨城県平民	稲葉一九郎	長崎県平民	林貞次郎
正司	三重県平民	藤井祐郎	滋賀県平民	古田龍雄
九一郎	大分県士族	峰 泰 世	北海道平民	白井倉太郎
正直	山口県平民	平田好藏	神奈川県平民	小川最治
塚 榮	愛知県士族	小澤壮太郎	鳥取県士族	河本久米太郎
三太郎	茨城県平民	金田平次郎	茨城県平民	門井靜彦
藤 巖	山形県平民	田中耒助	福岡県平民	南隣大恵
辨次郎	広島県士族	山 崎 峻	大分県士族	朝山又一
一武司	大分県平民	阪本薫太郎	山口県平民	阪上貞信
武三郎				

んどの計畫あり蓋し從來近在の坪方より
産出したる地織木綿縞は近年に至りて全
く其跡を絶ち却て三遠地方の産出を仰ぐ
ことゝはなりたり而して世態漸く奢侈に
耽り且つ輕薄ならんとして地織木綿に重
きを置かず斯くて確實なる素質を得るこ
とは頗る難きを望むものなり已を得ずん
ば特に機業者に就て依頼せざるべからず同
店は即ち茲に見るあり坪方に亘り機業の
心得ある人を求め之に染糸を供給して眞
正確實なる木綿縞を製出したるに販賣の
結果大に好評を博し現今にては同店と坪
方との間に仲買類の營業者を出すに至
り而して其營業者は坪方に對して染糸を

分配すると同時に同店に對しても一定の
義務を負ふものなり同店の華客場は安南
曇郡及淺間山邊方面にして特に淺間山邊
の兩溫泉場を限り華客場巡りの爲めとて
箱車を挽きて出賣せり

裏町

◎田中屋材木店

裏町通り下横田町東側に在り
同店は材木小白木類の一切を販賣し木曾
深林及南北安曇の各山林は申すに及ばず
遠く伊那地方より良材を取寄せ廣く建築
用並に建具指物用に供する木材を販賣し

大手口の注文あるも克く需用を充たすを
以て各家の信用頗る厚く且其價格の低廉
なるは其繁榮を見る所以なりといふ

◎松本松根乾留所

●松本松根乾留所は北深志裏町に在り、第
一工場を本所の附近に設け第二工場を女
鳥羽川東川原に設く同事業は一度東京近
傍に於て創設せられたることありしも更
に明治二十九年に至り香坂六郎大林由太
郎の二氏に依り始めて當地に之が設立を見
るに至れり

同所の製造品は則ち松根を乾留してター
ル木醋酸等總て洋式塗料の原料に充つる

ものにして今や其事業も創始に屬するを
以て多額の製出を見ること能はずと雖も
着々業務の進捗に怠るなくんば其販路の
擴張と需用の増殖は期して待つべし
第一工場は單に松根を蒸留して原料を得
るに止まり第二工場は蒸留したる原料を
精製するに在り而して其精製したるもの
をテレメン油と稱し總て之を東京へ向け
て輸送す
元來斯業たる廢物を以て目せられたる松
根を利用して有要斯の如きの製品を出す
に在り實に地方殖産興業の上に於て一生
面を開きたるものといふべく特に其海外
輸入品に反抗して益々業務の擴張を圖る

の勇氣に至ては殊に之れを稱揚せざるを得ず

餌 差 町

◎花岡染物店

山邊街道に添ふて南側中程に在り角に平の字を書して商標と爲し屋號を升屋と稱す
糸、反物、地類、絹、木綿を論せず染業一切を盡して遺憾なく藍、壺、六十二本を有して盛んに營業せり
位地恰も女鳥羽川を負ふて坐ら便利を縱横にし剩へ山邊街道を扼して幾多の花主

◎赤羽材木店

赤羽材木店は北深志餌差町中央北側に在り、主人赤羽菊松氏は専ら建築請負を業とし頗る信用あり、材木小白木類を販賣し木曾山林其他各産地の木材及び唐木類を多く販賣せり

安 原 町

◎山本砂糖店

安原立町通り中程より南方少許の西側に

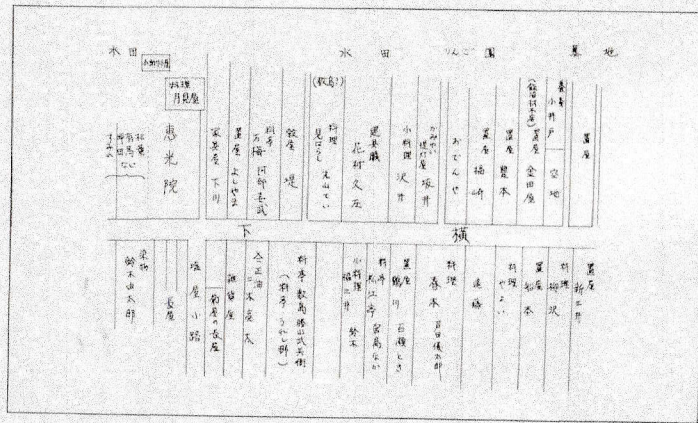
在り岩本屋と呼びヤマ本を商標とし和洋砂糖及東京製干菓子類を輸入して市中近在及四方の小賣業者に販賣し兼ねて紙類をも鬻げり位地北部に偏して遺憾あるに似たれども確實と勉強とに依りて取引益々手廣しといふ

◎三松屋材木店

安原横町和泉町寄り北側を占めて數代相絶の材木店たり、實に松本に於ける本業の始祖にして其功勞決して尠少なからざるなり、之に依りて建築用材の大手口請負の如きも多く同店の手に歸し小白木類又木曾特産の檜樅を仰ぎて遠くは甲州及東

京へ輸送し傍ら建具類を製造せしめ置き、市中其他への卸賣を爲し大手口の直接取引又頗る頻繁なり

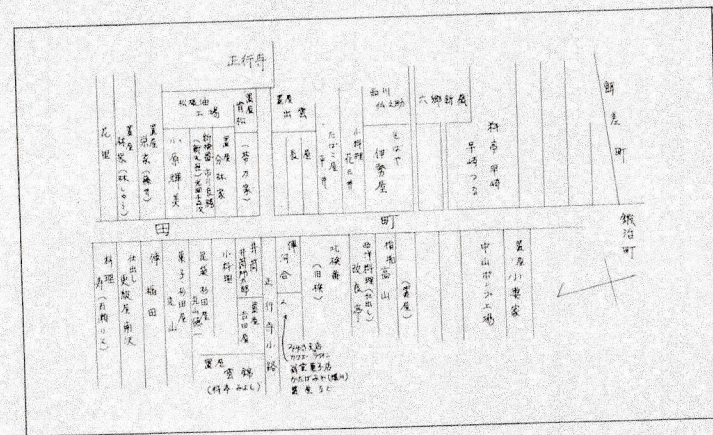
斯の如く營業最も久しければ古き得意筋も又自ら多くして信用勢力並び行はれ屋敷地の如きも至りて廣く材木置場作事小屋と相接して裏手深き所に巍然として倉庫の屹立するを望む實に同店の如きは確實を唯一の特色とし一貫して立つものなり今や兵營の建設を眼前にし之に伴ふて起るべき幾多建築の續出に對し特に同店の如きは前途甚だ多望なりとす況んや鐵道の開通を待つて大に木曾伊那の山林を吸收すると同時に更に全國各地に向つて



するの不明。当時あった空地の裏手には養蚕業の小井戸宅があり、飯沼木材店となりあっていた。この小井戸は餌差町に本家があり、いまの上土町の小井戸紙店と縁つづきだ。飯沼宅には、のち置屋の金田家がやってきた。ここから北へ、豊本、福崎と置屋が並んだ。いまの裏町鯛萬へ通ずる露地の南角はおでん屋商売。鯛萬は山田家という置屋だった。緑町の鯛萬レストランは、明治の中ごろは「鯛めし」として名があった。露地の北角は提灯屋という屋号の髪結。坂井という女主人の孫娘がいまも美容院を経営している。

となりは小料理の沢井、そして古い家の花村宅となる。花村は建具屋だったが、いまは旅館営業だ。北が見はらし料亭、主人は丸山で、三階建ての料亭敷島亭も真向かいにあった。敷島は早崎、万梅、三よしと並び称される料亭だった。万梅はいまも三階建ての土蔵をそのままに残しており、当時の花やかさも想像できる。堤は万梅の南となりで、ここは穀屋をしていた。置屋のよしやま、そして建具の下川で恵光院まで続いた。

恵光院わきの路地は農道として用いられたごく細いもので拡張されて広がったが、この土地の分に月見屋料亭もあり、東



陽銀行松本支店ビルの位置に移り、慶長年間に下横田町へ本堂や塔頭を造営した。明治三十四年、七十六歳で没した高綱二十一世の佐々木了綱は、猛烈をきわめた松本藩の廃仏棄釈に抵抗、安筑二郡の真宗二十三寺を守り抜いた高僧。陸軍大将乃木希典との交友は知る人ぞ知る。塔頭にはいま妙勝寺、玄正寺、芳仙寺がある。

正行寺入り口の北側には松本松根乾留所があつて洋風塗料の原料テレメン油の精製が仕事。明治二十九年の創設で香坂六郎、大林由太郎が経営した。明治四十五年の大火がここから出た、という説もあるが、この工場がこののち、千歳ビールの工場になった、ともいわれる。ここから北側は置屋がずらりと並んでいる。帯刀宅のとなりは分林家、つぎが新検番だった。新丸笹でもあったという町民もいる。市川良勝、光岡与喜次という名も記憶される。新検番は旧検番にたいしての名称である。大正期に居住した小原輝美は松本市議もしたし、新聞も発行した。北どなりは置屋の栄家、つぎも置家の林家(林亭)で、林しやうがさいはいをふるった。

ふたつの露路をはさんで置屋があつたが、いつの年代に該当